



Title	北海道アスパラガスの発展に於ける経済面 : 其の栽培者と加工者
Author(s)	荒又, 操
Description	研究
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 57-86
Issue Date	1940-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10677
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p57-86.pdf



北海道アスパラガスの發展に於ける經濟面

—— 其の栽培者と加工者 ——

荒 又 操

本稿の目的は北海道に於ける石刁柏（アスパラガス）栽培の導入過程並に其の加工部に關する若干の問題に關し、之が經濟的側面を素描するにある。

之れに就いて先づわれわれの關心を引くのは、近年北海道に於ける此の作物栽培に於て見る所の極めて顯著な發展現象である。勿論其の作付の絶對面積は今日に於ても未だ一千五百町歩そこくであり、本道に於ける各種主要園藝作物、主要特殊作物との比較に於ては勿論問題にはなるまゐが、其の年々の擴張テンポの極めて異例的である點にわれわれの注意が向けられるのである。而してわれわれの興味を感ずるのは、斯る現象——アスパラガス栽培の著しき發展テンポ——の背景をなし、或は之れが要因をなして居ると見做さるゝ所の諸事項、特にアスパラガス栽培の導入展開に對する一部商工企業者の役割、並に之れが作付を受容した所の本道の農業乃至農業經營の社會的自然的環境の考察等にもあるが、更らに最近之れが罐詰加工部に於て見た所の農村産業組合の進出現象の中に、われわれが、本道農村産業組合の積極性、産業組合運動に於ける謂はゞ實踐的發展を示唆されるものがあると共に、本道に於けるアスパラガスの栽培、加工、特に其の産業組合による協同加工に、更らに一般食料農産物加工の上にも之れが將來性に多分の冀待を持ち得る點に掛つてゐる。

二

もとくアスパラガス (*Asparagus officinalis* L.) は牧場、草原等の主に流水に沿ふた處乃至海邊杯に野生して居る植物であるが、之れが人類によつて農作物として栽培される様になつたのは歐羅巴では既に甚だ遠き昔に遡る。尤も古代エジプト人が此の植物を知つて居つたか否かは不明であり、又古代ギリシヤでも、植物學者ディオスコリデス (*Dioscorides*, um 100—200 n. Chr.) の記述したのは硬き刺狀の葉を有つもの (*Asparagus acrifolius* L.) であり、茲に謂ふ處のアスパラガスではなく、又同じくギリシヤの醫師ガレーヌス (*Galenus*, um 200 n. Chr.) が *asparagoi* と命名したものはアスパラガス類似の若芽で食用に供し難きものゝ總稱であつたと言ふが、其後の農學者は慥かにわれわれの茲に謂ふ眞のアスパラガスをも知つてゐたとのことである。併しギリシヤでは今日でも眞のアスパラガスは餘り栽培されて居らず、却つて前に述べた *Asparagus acrifolius*, L. の方が豊富であり、而かも高價であると言ふから、此の地方では兎もあれ、人類にアスパラガス栽培の發展を齎したのは同じ歐羅巴でも特に古代ローズ人に依つてである。と言ふのは彼の有名なローマの農業著述家カトー (*Cato*) 並にコルメルラ (*Columella*) はアスパラガスとして今日われわれが植物學上謂ふ處のものを理解して居たのみか、彼等古代ローマ人の記述はアスパラガスに關し既に非常に有益な價値高き栽培技術 (例へば播種後數年にして移植しその根張りを可良ならしむべきこと杯) を教へて居る事でも知られる。して見れば人類のアスパラガス栽培歴は歐羅巴では實に二千年の永きに及んで居る譯である。

處で我が國ではどうかと云ふと、「キジカクシ」と言ひ北海道では「ホタルグサ」と俗稱する所の各地海岸地方杯の輕鬆土壤地に野生するものはあるが、之れが栽培を教へられたのは近く徳川末期、明治維新より五十餘年前、和蘭人が長崎に傳へたのが始めであらうと言はれる。而かも其の當初は觀賞用として庭園に栽植されたものが僅かあつたと言ふに過ぎず、食用として輸入したのは明治四年頃であり、明治六年勸業寮の農園に試作し、

- 1) J. Becker-Dillingen : *Handbuch des gesamten Gemüsebaues*, 2te. neuarbeitete Anfl., 1929, SS. 795—796
- 2) 北海道農事試験場時報, 第28號, 1頁
- 3) 故に「オランダキジカクシ」或は「野夫門冬」なる和名がある。下田喜久三、アスパラガス, 1頁、柘植六郎、最新蔬菜園藝、483頁、北海道勸農協會、北海之殖産、40號、29頁等。尙之には松葉うど、西洋うど杯の別名がある。

各地に之を分配した⁴⁾のが日本でアスパラガスを食用として栽培せられた嚆矢の様である。して見ればアスパラガスは我が國では其の栽培歴の極めて新しい作物の一つであると謂はなければならぬ。北海道でも此の作物は明治初期開拓使によつて輸入せられる所があつたと言はれる。併しながら爾後更に五十有餘年の間、之れが栽培の勸奨が無かつた譯ではないけれども⁵⁾、殆んど何等の發展を見ず、斯くて遂最近までは其の栽培は本道に於ても全國的にも極めて微量に止まり經濟的には問題とすべき程のものではなかつたのである。我が國に於て初めて之が少しく纏つた面積に作付されたのは、大正の末期北海道岩内地方に栽植されたのが創りであつて、本邦のアスパラガス栽培に多少とも經濟的産業的意味を有たしめたのは初めから北海道に於てであつた。而して爾後の發展も殆んど獨り北海道に限られて居り、府縣では最近兵庫、愛知、岐阜、静岡、長野等諸縣に僅かに之が栽培せらるゝものあるに過ぎず⁷⁾、其の作付面積の如き幾許あるものか勿論未だ當該地方の統計にも上らぬ程度である。

三

斯くて今日、我が國のアスパラガス栽培は北海道に於けるそれであると言ふことになるが、而かも其の大半は後志地方に、而かも亦其の過半は虻田郡の喜茂別なる一村に集中して居る狀況である。

先づ最近本道に於ける之れが作付面積を示すと次の如くである。

第一表 北海道に於けるアスパラガス作付面積

支廳及市別	收穫反別			未收穫反別	作別計付反別	支廳及市別	收穫反別			未收穫反別	作別計付反別
	昭十一年和	昭十三年和	昭十四年和				昭十一年和	昭十三年和	昭十四年和		
石狩	三三・〇〇町	三三・〇〇町	七三・〇〇町	二五・八三町	九八・八三町	網走	—	一・〇〇町	九・七〇町	—	九・〇〇町
空知	三三・一〇町	三三・七〇町	六五・一〇町	四〇・三三町	一〇六・一三町	宗谷	—	—	—	—	—

4) 柘植六郎 前掲書 483頁
 5) 高倉新一郎氏による
 6) 例へば北海道農會の前身北海道勸農協會は其の機關誌北海之殖産40號(明治26年10月)に於てアスパラガスは東京地方に於て反當200圓の收益ありと言ひ更らに佛蘭西の之れが栽培收支をも掲記して本道農家の參考に供し、更に同誌42號(明治26年12月)には札幌農學校教師ブリガム氏に就きアスパラガス栽培技術並に其の用法を可なり詳細に紹介して之れが栽培を勸奨して居る。其の中に曰く「アスパラガスは……當札幌などにも十分に適し、現に近傍村落中にも耕作するもの兩三名を見ら

査せられたものを見ると、

第二表 昭和十五年春迄に植付すべき豫定反別

支 廳 別	反 別	支 廳 別	反 別	支 廳 別	反 別	支 廳 別	反 別
石 狩	三・六〇町	檜 山	一〇・〇〇町	十 勝	九・一〇町	留 萌	三・〇〇町
空 知	四・〇〇町	渡 島	四・五〇町	網 走*	三・〇〇町		
後 志	一三・〇〇町	膽 振	六・六七町	宗 谷	三・〇〇町	計	五・八・七

右表の如く之れだけで五百二十町歩に近い面積であるから、本年の北海道アスパラガス作付面積は二千町歩を越加することになる譯である。

而して之を地方別に見ると、第一表が示す如く收穫反別では昭和十一年五百七十餘町歩の七九%、四百五十餘町歩は後志地方であり、更に其の六〇%餘に當る二百七十三町歩は喜茂別村一村に集中して居つた譯であり、此の集中状況は昭和十三年にはそれ〱六〇%、五八%の割合となり、昨年は全道千八十餘町歩中の七〇%、四百六十四町歩が後志地方に、更らに其の五九%四百五十二町は喜茂別村にあり、全道的にアスパラガス收穫反別の著増にも拘らず主産地後志地方、喜茂別村の占むる相對的地位には左したる動きを見ないのであるが、右昨年收穫反別に其の未收穫反別を加へた總作付反別に見ると、全道では前述の如く千五百町歩餘、其の中後志地方は依然七〇%餘の割合を占め千五十八町歩の廣きに及んで居るが、内喜茂別村は五百十九町歩で其の後志地方内に占むる割合は四九%となり、相對的には幾分の低下を示して居る。處で本年春季迄に植付すべき豫定反別(第二表)では、全道五百十九町歩中後志地方は百二十五町歩であつて二四%餘であるに過ぎないに對して、昨年まで其の作付反別微少で言ふに足りなかつた網走地方が一躍右新規植付反別の六〇%三百十町歩の増反が豫定されて居ると言ふことはわれわれの注意を引かすには置かないが(第二表の脚註)、此の點の説明は後節に譲る。茲では只これ

7) 宮澤春水 北海道に於ける加工用園藝作物の栽培、北海道廳、園藝講演要録第四輯 58頁

* 網走地方常呂村に蟹罐詰工場を有つ極東罐詰株式會社が同工場でアスパラガス罐詰加工を開始すべく此の地方に大規模に原料を培養(目下一部農家に委託して育苗中の様である)しつゝある。

まで過去數年間に於ける本道アスパラガス栽培の發展、特に其が後志地方、喜茂別村を中心として集中的に展開して來た事實に注目すれば足る。斯くて收穫高は昭和十一年全道で約十七萬貫、内、後志地方が六五%の十二萬貫中、喜茂別村が約七萬四千貫で、後志地方の六二%に當つて居り、之れが價額は全道で約十二萬圓、内後志地方が七一%の八萬五千圓中、喜茂別村五萬九千圓で後志地方の六九%であつた。之に對して昨昭和十四年の數字は未だ之を知り得ないが、前掲收穫反別の増加狀況から推して、極く少く見積つても全道で三十二萬貫、二十三萬圓、内、後志地方が二十餘萬貫、十四萬五千圓、その中、喜茂別村が十二萬六千貫、十萬圓であり、實は之よりそれ〴〵遙かに大であつたであらうことは疑ないと思はれる。

四

處で如何にして斯る顯著なアスパラガス栽培の發展が、而かも一特定地區を中心として齎らされたかと言ふと、其は今日までの處或る商工企業者によつて導入され、謂はゞ罐詰資本のイニシアタイプに依つて誘發され指導されて來たものと言ふことが出来る。と言ふのは、アスパラガスは我が國ではもと〴〵栽培歴の極めて淺い作物であること前述の通りであり、而かも其の栽培歴もこれまでは技術的意味でのそれに止る所の、單に試験場的研究的栽培たるか乃至作物標本的又は數奇者の栽培たるに過ぎず、現實の農業經營に結びつき農業生産として具體化した所の經濟的實質的栽培歴ではなかつた。即ちアスパラガスは外國では之を生蔬菜として消費せられるものも可なり多く、例へば米國の如き其の生産高の約半は生蔬菜として市場に供給され、而かも其の單價は罐詰原料たるもの、優に二倍に取引されて居るが如くであるが、本邦では從來一般に斯る生蔬菜に親しむ機會とはなく、従つて之れが家庭に於ける調理法杯を心得る者のあらう筈もない。畢竟アスパラガスは本邦では生蔬菜としては商品的價値なく、生産されても之れが市場がない。精々栽培者の多少とも自家用にでも供することがあれば關の山であつた。處で一方我が國にも上層、智識、中流諸階級の消費生活の中に次第に洋風が浸潤して來ると共

8) 之は昭和11年の各生産高、價額に昭和14年收穫反別の昭和11年收穫反別に對する各増加割合を乗じた數であるが、昨昭和14年には後述の如く單價の上騰があるから、價額は之れよりも恐らく少くも二割位は大であらうかと思はれる。

9) 北海道廳囑託、米國駐在員河井信三氏の報告文(1931, 7, 24)によりて推定。

に、調理済みアスパラガス罐詰¹⁰⁾の輸入が増加し之れが消費が次第に廣まつて來、茲に一部商工企業者、罐詰資本の活動が展開せられることになつて來たのである。それは兎もあれ、現に我が國ではアスパラガスは生蔬菜としての市場を有せず、アスパラガス栽培は之れが罐詰加工との連繫あつて始めて可能である。従つて北海道農家のアスパラガス栽培は、先づ、農民の自主的創意の結果ではなくして、罐詰資本によつて誘發導入せられ、罐詰資本の積極的培養に俟つて始めて生長せしめられたものであることを知らなければならぬ。次に其の経緯の大を要を述べることにする。

五

北海道農業に於けるアスパラガス栽培の導入に對し最初のケルンを投じた人としてわれわれは下田喜久三氏を見出す。氏は大正九年岩内町に瑞洋食品研究所なるものを開設し、グリーンピース、野生筍の罐詰加工を試み、其の技術を研究しつゝ農産加工事業に思ひをひそめて居つた企業家であるが、氏がかねて外國より集めた、數種の農産種子の中、アスパラガスが冷害に耐ゆる作物として本道に適することを知り、同所に於て之れが栽培並加工試験を行ふ所があつたが、大正十一年に至り此の事業の有望性を認め、時の北海道長官に建白書を提出して、北海道の開拓の促進、産業の開發のために此の事業に着目力を致すべきことを進言した。之れが事業慾に旺盛な時の長官尾舜治¹¹⁾氏の容るゝ處となり、翌大正十二年三月下田氏は北海道廳の委囑を受けてアスパラガスの栽培加工調査の爲めに海外に遊び約半歳の間彼の地の主要アスパラガス生産地を視察調査して同年九月歸朝するや、いよいよ斯事業の有望を確信して、翌大正十三年十一月、日本アスパラガス株式会社(以後本稿では「日本アスパラガス」と略稱する)を創立し、茲にアスパラガス罐詰加工は初めて企業化される運びとなつたのである。

其處で之れが原料を獲得する爲めには、差當つて岩内町南方高丘地に會社直營の農場六十町歩にアスパラガスを栽培(大正十五年)したのであるが、同年下田氏は札幌市外豊平町極東煉乳株式會社(現在明治製菓株式會社に合併)に在つて其の農産加工部を擔當してゐた神宮司榮氏と共に再び北海道廳の囑託を受けて、今度は主として北米

- 10) 米國より輸入、昭和4年、1,170,992封度、181,540弗、昭和9年、807,023封度、93,482弗、爾後減退、今日輸入皆無、——これ北海道に於けるアスパラガス罐詰生産に負ふ處後述の如くである。
- 11) 例へば、北海道甜菜糖業に對する北海道廳の積極的保護政策が確立されたのも宮尾氏の長官時代であり、其の今日の發展の礎石の置かれたには在官時の同氏の努力に與つて力がある。即ち、氏は當時之れが宣傳班に加つて帶廣に赴き、自ら演壇に立つて直接地方農家に甜菜栽培を勸奨した程の熱心さであつた。(中島九郎博士、北海道に於ける甜菜糖業の勃興、農業經濟研究、第1卷第1號101頁)

のアスパラガス事情を視察して來てゐる。それはともあれ「日本アスパラガス」の直營農場は昭和三年頃から收穫され、其の工場は之れが罐詰製造を開始した。併しながら斯る直營農場による原料採取を以てしては原料原價の比較的高くつくであらうことは容易に想像せられる處であるのみならず、斯る原料のみでは合理的工場經營上十分の量を得難いことまた言ふまでもない。斯くて「日本アスパラガス」下田氏は、農家にアスパラガス栽培を勸奨し依つて十分に其の工場原料を確保すべく豫て之れが適地を物色して居たのであるが、これより先き喜茂別村に於て自ら農業を經營しつゝ、同村農會に技術員として勤務して居つた佐藤恒雄氏は岩内下田氏のアスパラガス試作の事を聞き、大正十四年「日本アスパラガス」のアスパラガス試作圃と其の工場を見學し、同年秋苗百株を譲り受けて一部は自ら試作し一部は同村内篤農家に栽植せしめる所があつたのが機縁ともなり、やがて昭和三年上述の如く原料の栽培適地を物色する「日本アスパラガス」下田氏の喜茂別村視察となつた。下田氏としては其の初め隣村南尻別方面に作付せしめん意向を有つて居たものゝ如くであるが、喜茂別村が南面した大きな澤から成り融雪後の地温上昇の速やかなることや土壤の輕鬆なるに於て氣候的にも地質的にも該作物栽培に好適するものあるを認め得たことゝ、當時の本村々長千葉忠次郎、農會長萩野榮三郎兩氏並に前記佐藤氏等の斡旋も手傳つて、此の村に「日本アスパラガス」は其の原料を求むべく之れが作付の培養に發足することゝなつたのである。即ち翌昭和四年「日本アスパラガス」は前記本村主腦者の斡旋協力を得て、此の村農家にアスパラガス耕作組合を組織せしめ、耕作者に苗代を前貸して之れと原料需給に關する特約關係を結んで會社は其の必要とする原料アスパラガスの栽培を累年此の村農家の中に培養し來つたのであるが、之れが北海道に於けるアスパラガス栽培發展の中心の契機であり、喜茂別村に於けるアスパラガス栽培の展開は實に「日本アスパラガス」の本村農家に上述の如き所謂原料供出特約組合を結成せしめたのに發足して居り、而して北海道廳では此の耕作組合に對し毎年百五、六十圓位宛を三、四ヶ年補助して農家のアスパラガス栽培——會社の原料源培養を助成する處があつた。

即ち喜茂別村では先づ昭和四年春に下田氏とアスパラガス耕作組合員との間に耕地四十町歩についてアスパラガス苗と之れが生產品たる一定規格の嫩莖の賣買が約束せられたが、引續き同年秋には約三十町歩擴大せられた。が、之は、農家にとつて目新しく其の栽培に全く經驗なき新規作物のことゝて成績芳ばしからず、僅か十二、三町歩を残して他は廢さるゝに至つたけれども、爾後除々に之れが増加を見、昭和五年には全部で約五十町歩となり、昭和九年には既に百町歩を越ゆるに至つた。處が從來、函館、東京等に於て主として小罐詰業者、小食料品製造業者に對する前貸商業資本として活動して居つた所のものが本事業の有利性に着目し、之れが主體となつて昭和八年朝日アスパラガス罐詰株式會社(本稿では爾後「朝日」と略稱する)を創立、資本金十一萬圓を以つて新たな罐詰資本として登場し、本村に工場を開設、之れが昭和十年、本村に新たに耕地百七十町歩についての原料アスパラガスの特約關係を結び爾後漸次之れを擴張栽植せしめた外、小樽市の株式會社極東罐詰製造所も亦本村内農家にアスパラガス罐詰原料の特約組合を組織せしめると言つた状態であり、斯くて本村に集中的アスパラガス栽培の發展を見るに至つたが、更らに、後に稍々詳しく述べる様に、昭和十二年、此の村の産業組合がアスパラガス罐詰加工事業に進出すべきを決意し、諸般の準備過程を経て、稍々大規模に昨昭和十四年其の加工の第一回シーズンを迎へるに至つたと言ふが如き有様で、本村のアスパラガス栽培は益々其の増反が刺戟される處があつた次第である。斯くて本村は曩きに述べた如く全道従つて全國第一のアスパラガス栽培地として其の名が著聞する様になつた。

要するに北海道農家のアスパラガス栽培は「日本アスパラガス」罐詰資本によつて喜茂別村に誘發せられたものであり、其の第一歩の印せられるや否や、同じく此の地に原料を求むべく諸他の罐詰資本が登場して其の増反を促進して止まず。茲に遼原の火となつて本村のアスパラガス栽培は展開、而して之れが火元となつて後に述べる様に近隣村に燃え擴がり、更に全道各地に飛火し、其の中には將來の發展の新たな據點たるであらうと見做さ

れるものがあると言ふ現狀である。

六

北海道の、而して特に喜茂別村を中心としてのアスパラガス栽培の斯る發展は、勿論今述べた様な罐詰資本の此の地に於ける活動によつて誘發、促進されたものには相違ない。併しながら罐詰資本が當初此の地に其の原料足場を求めたにしても、其の足が地につき能く其の實を結ぶに至つたに就いてはそれ相應の根據があり、條件が具つてゐなければならぬ。それは如何なる點にあるか。

先づ第一に考へられるのは本道の、また喜茂別村の自然的條件のアスパラガス栽培に對する好適性である。元來アスパラガスは輕鬆なる土壌でむしろ水透性の土地に好適するのは、本邦海岸地方の砂質地杯にハマナス等と共に之が野生するものあるを見るので分るが、之れが栽培には斯る土壤地質條件を有し而かも有機質に富んだ相當の肥沃度が必要とせられる。而して氣溫關係には左したる窮屈さがなく極端な寒帶的或は熱帶的氣溫下でさへなければ生育する。氣溫寛容度が大きいと言ふよりはむしろ或る程度冷涼である方が所謂アスパラガス銹病の發生が少なく其の生育の却つて良好な作物であり、アスパラガスには所謂冷害がない。と言ふのは、昭和六、七、九、各年の北海道の凶年にアスパラガスは不作でなかつたことに依つても立證せられて居る。此の點に見て北海道各地は概してアスパラガスの自然的適地たるの條件を既に一應具備して居る。世界に於けるアスパラガスの名産地と言はれる米國加州、獨逸ブラウンシュワイヒ (Braunschweig) の中、加州は本道に比して稍々高温であるが、ブラウンシュワイヒの氣溫は本道と大差がない。¹²⁾ また土壌の輕鬆水透性に於ては本道各地に廣汎に分布して居る所の火山灰質壤土は此の點に十分の適格性を有つと謂はなければならぬ。¹³⁾ 尤も前にも言つた様に、此の作物は同時に土地に有機質を有ち相當の肥沃度あるを要するから地力の甚だしく劣り其の儘では利用し得ない所の所謂火山灰地を茲に指して居るのではない。——斯くて本道は偏北、稚内地方でもアスパラガスは普通に生

12) 宮澤春水、北海道に於ける加工原料としての園藝作物について、北海道農事試験場園藝に關する研究報告。

13) 拙稿、北海道農業の地域的形相、社會政策時報、230號、49—54頁。

育し得ることが試験報告せられて居るから、適地を選べば全道的に、技術的には其の栽培は可能の様である。¹⁴⁾ 處で喜茂別村は羊蹄山乃至有珠山系統の火山灰質壤土地方に屬するから輕鬆水透肥沃性を要求する土地條件に見て正に右に言ふ意味での適地に該當する。

次に農業經營式との關係である。アスパラガスは言ふまでもなく畑作物であり、畑作經營とでなければ能く結び付き得ないのは勿論であるが、例ひ畑作經營と言つても、府縣の園藝的畑作經營の如きとは必ずしも能く結びつき得ない。と言ふのは曩きにも言つた様に、本邦のアスパラガス栽培は今日の處罐詰原料としての生産であつて、生蔬菜としての商品生産ではないから、従つて其の單價は必ずしも府縣の集約的園藝農産物の如き高價なることを得ず、また加工部面に於ける經營技術上、一定地區に相當面積の集積生産が必要とされるからして、従つて經營の或る程度の粗放性¹⁵⁾、従つて地價乃至土地用役價格の比較的低廉なることを前提條件とすることに依つて、少くも本邦内地としては、北海道の廣汎なる畑地の存在、従つて本道畑作農業經營とこそ結びつき易い理である。而して喜茂別村は地形地質條件の故に水田の造成を見ざる純畑作地帯に屬し、其の一經營當り耕地面積は七、八町歩位を標準とする處の地方で、十勝地方の如き粗放的大面積經營よりは遙かに集約的であるが、而かも府縣の一般畑作經營の如きに比すれば言ふまでもなく著しく粗放である。而して從來多く菜豆、馬鈴薯、燕麥乃至は除虫菊など比較的粗放な市場作物を栽培し、早くから高度の商品生産に習熟して來た地方であるから、従つて其の換金作物たるに於て同じい所のアスパラガス栽培への一部轉換結合が比較的容易であつたものと考へられる。

七

一般に北海道の農業特に畑作農業は府縣農業に比して極めて其の商品生産度が高いことから、本道農家は概して府縣農家に比して貨幣經濟觀念が遙かに強く、營利心に富み景氣感受性に敏感であり、之れを或は進歩的とも或は投機的射利的とも言はれる次第であるが、それはともあれ、農業經營の一定様式に固着し單なるルーチンの繰

14) 伊藤潔 後志地方に於けるアスパラガスの栽培、園藝、29卷、12號。

15) 尤も之は府縣の園藝經營の著しき集約性に對して言ふ粗放性であり、北海道の標準によつて言ふ所の粗放性ではない。従つて本道十勝地方に見るが如き粗放大面積經營を以て其の儘にアスパラガス栽培への適格性を言ふものではないことを注意せられたい。アスパラガスは後述する如く北海道の畑作物としてはむしろ集約的なるものゝ一である。

16) 前脚註參照。

17) 中島教授が摘出せられた所の統計的事實（第一次歐洲戰爭勃發後に於ける馬鈴薯作

返しに墮することのむしろ一般な我國の農家に於て、獨り北海道の特に畑作農家では斯る惰性に比較的稀薄であることは眞に疑ない事實である。斯くて本道農家は府縣農家よりは新規作物の導入に於ても遙かに果敢であり、何等かの刺戟乃至は利益誘導によつて、比較的容易にアスパラカス栽培の如きを其の經營の中に採り入れると考へられるのであるが、特に喜茂別村農家の間には此の氣風が他より一層顯著に見られる。それは獨り單に此の村農家が畑作農なるが故に有つ斯る傾向の一般性以上に、從來とも此の村農家の氣風として認められて居た處である。即ち或は大福豆が利益多しとて大福豆に走り、或は除虫菊栽培に相競ひ、或は藥草生産の利を追つて之れが栽培に飛びつくと言つた状態であり、貨幣的利益を求めて各種作物を果敢に取り入れ取り換へて來たのであつて、此の間或時は大利を博して喜び或時は著しき損失に泣き、或者は産を興し或者は倒産した。例へば此の村に於て除虫菊栽培の盛んであつた大正十四、五年頃の如き其の作付五百町歩に及び其の花期には全村眞白に遠望されたと云ふが、やがては病害の發生と外部經濟的變化を感應して今や全く其の跡方も見難い状態である。次表は本村に於ける二、三の作物の最近に於ける作付反別の變遷であるが、僅か八ヶ年間に其の變動更代の如何に甚だしきとか、本村農家の上述營利心による農業經營の内容動搖の一斑は之れによつても概ね察知することが出來やう。

第三表 喜茂別村、一、三作物作付面積の動き

	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年
菜豆	一、二三四・六 ^反	一、一五九・七 ^反	一、〇九二・一 ^反	一、〇五九・九 ^反	九一三・〇 ^反	八五四・六 ^反	七三二・七 ^反	六四三・五 ^反
馬鈴薯	五二・四	六五九・九	六六〇・〇	八五三・三	七〇七・八	七九七・七	六二二・七	六七四・一
除虫菊	四三〇・三	四八四・〇	四六四・九	四四四・四	三三〇・五	八〇・九	四〇・八	四一・八
碗豆	一三三・八	一四九・〇	一三三・三	一七二・八	一〇・六	四三・二	三〇・九	三三・三
アスパラガス	三六・八	五五・五	五九・八	八〇・八	二七三・四	二九二・〇	三二二・三	四三二・九

付反別の動搖狀況についての本道と青森縣との比較表)は此の點を極めて簡結明瞭に實證して餘すところがない。中島九郎博士、北海道農業の特質と變遷、社會政策時報、230號、27頁。

斯くして本村に於ける急速なるアスパラガス栽培の展開は本村農家の營利的進取性なる一般的素地があつたからこそ始めて可能だつたと考へられる。

然らば此の村農家に於ける一般他地方に比してより、敏感な貨幣經濟的觀念は如何にして出來たものであらうか。其れは一面には此の村耕地が開かれた當初其の自然條件に依る一定の制約下に栽培された作物がたゞ、對外關係の深い輸出向作物であり、従つて之を通じて早くから此の村農家が否應なしに外圍の經濟的變動にまとも接觸を餘儀なくせられ、かくて次第に斯る外圍の影響を受けて彼等の營利的觀念乃至進取性が馴致され、之れが今日あらわになつて來たことであらう。或は本村農家に對して指導的地位に在つた(例へば元本村農會長の如き)または在る人々の氣風にも固より因由する所であらうと思はれる。併しながら他面、本村の今日までの開拓經過並に本村農家一般住民の移住系統の中にもかゝる氣風に關係する所深きものがありはせぬか。本村は素と木材の伐採生産地として人々の入地を見た。而して彼等は交通の關係上主として太平洋岸から伊達、壯瞥、德舜瞥等を経由して入地し來つた。明治十七年有珠郡伊達村に於ける伊達邦成男が其の舊臣阿部嘉左衛門氏をして居を本村に定め驛遞所を設置せしめたのが本村に居を構へたものゝ濫觴であると思はれるが、其の後縫部兼吉なる人によつて此の地に製軸工場や建築事業杯が開始されて居る。ともあれ此の村は其の初め主として太平洋岸方面から木材の伐採を目的に入地した人々によつて開拓の第一歩が印せられた様であるが、他方、其後日本海方面からは岩内、磯谷、壽都等に於て従前一獲千金の鯨漁業に依つて生活してゐた人々にして、鯨漁業の衰退と共に此の地方に入つて來た所の本村住民の移住系統がある。斯くして本村は東海岸方面からの林業民と、西海岸方面からの漁業民との落合つた彼等の謂はゞ溜溜地點である。本村農業が今日斯る移住系統の人々或は其の子孫乃至は其の氣風感化を受けた人々によつて現に營なまれて居るとしたならば、本村農家が一般農家の通有性たる保守性に於て比較的稀薄で、むしろ積極的營利的であり、一定の農業經營様式に膏着すること少なき氣風の存在を首肯出來

るであらう。

八

それはともあれ、本道特に喜茂別村を中心としての罐詰資本の働きかけが、此の地方アスパラガス栽培の展開に於ける根本動因であることは否めない。而して一定の之れが加工設備は一定量の原料を要求する。而かも其の原料は蒐集運搬等の費用關係から——特に原料たるアスパラガス嫩莖は時の経過取扱の如何によつて極めて其の品質を低下毀損し易きものであるが故に——一定地區に一定量以上之を集積供出させることが必要である。従つて一旦喜茂別村に於て其の一部農家と、一定面積のアスパラガス栽培並に其の生産嫩莖の供出に關する特約關係が結ばれた以上、アスパラガスは多年性作物であり、而かも植付後嫩莖採取までに兩三年を要するから、又前述の如く一般農業者に取つては全く新奇な作物であるから、にわかにな原料採取地を他の地方に移し或は之を新設することを得ない事情も手傳つて、同一村内に於て、更に其の原料の必要量を獲得すべく契約栽培面積を擴大せしめなければならぬ所の資本側の事情がある。斯くて罐詰資本はなるべく同一地域内に於ける原料生産を十分ならしめる爲めに前貸、其の他利益誘導によつて之が培養に力を致すと共に、前貸制と契約制とによつて栽培農家を固定的に自己に連繫從屬せしめ、以て其の培養した原料受入を確保せんとするのが一般である。斯様にして、一方一定地區喜茂別村の農家にアスパラガスを栽培せしめ様とする罐詰資本の働きかけは、他方本村農家にとつて此の作物の栽培が同地方の他種作物に對して比較的有利と見做されたか、或は少くも不利でないとの農家の見透しの結果として本村のアスパラガス栽培は具體化し集中的に發展促進せしめられた。

(註) 本村アスパラガス栽培の收支については今日までの處信憑すべき調査資料がない。が、本村で實地に之を栽培して居る人が概察として余に語つた所では、植付後嫩莖採取までの二年間は間作によつて肥料代の一部が得られる程度であり、反當、昨年のアスパラガス相場で、三年目最初の嫩莖採取年は收支とんとん位で純收なく、四年目にして初めて純收一〇—三〇圓、五

年目三〇・七〇圓、六年目以降八年目頃までは各年五〇・九〇圓位の純收であると言ふ。九年目以降は生産量遞減し、株の經濟的存続年限は約十五年とせられてゐるが、本村には未だ八年以上の老齡株はない。

兎も角これだけの反當純收入があれば、此の村の他作物との比較に於て慥かに有利な作物の一であらう。併しながら經營の全體から見ると、アスパラガスは多量の堆厩肥を要し、従つて此の地方農家では其の堆厩肥の大部分をアスパラガスに投じて了ふことになつて他作物栽培地の地力減耗を來すのみならず、勞力もアスパラガスに集中的に投下され、他作物は爲めに其の管理が粗略となることも手傳つて、他作物收量の減退を結果して居る農家も少くない様であるが、かくてはアスパラガスの有利性は同一經營内に於ける他作物の不利性の原因をなして居るとも見られる。然ればとてアスパラガスの單作經營の如きは、勞力の季節的分配の關係上、特に採取時期五、六月の勞力不足のため一般には到底不可能である。

斯くて經營内にアスパラガスを導入することによつて、經營全體としての農家の收益を常に増進し得るとは輕々に論斷は出来ない。

尙嫩莖採取期には朝は二―三時に起きなければならず、夜も早くは寢につき得ない所の技術的事情は、新たに農民保健の上の問題を投ずるものがある如くである。而かも尙且農家がアスパラガス栽培に勞力資本を投ずる所以のものは、農家に於て經營上現金支出の最も多く而かも現金收入の全くない春季に於いて、アスパラガスのみが却つて此の時期に現金收入を齎らす事實が少くも中農以下にとつての著しき魅力となつて作用して居るが爲めと考へられる。

九

併しながら、其後本道アスパラガス栽培の發展は、次第に道内各地方に之れが栽培個所を散出せしめ、此等散出個所を據點とする他地方のアスパラガス栽培の展開によつて、相對的には後志乃至喜茂別村への集中性が幾分薄らいで來る傾向があるのは固より當然である。斯くして現在アスパラガスの罐詰加工は次表によつて示すが如く、全道で大小取混ぜ十主體、十一工場（本年は十二工場）で營まれて居り、其の罐詰生産高は六萬六千餘函、價額百六十二萬九千餘圓と概算せられ、内三萬五千餘函は海外輸出分として割當てられ、時局柄我が國の對外交拂力に寄與して居る。

第四表 北海道アスパラガス加工工場並製造高 (昭和十四年)

工場名	所在地	製造高		商標
		數量	價額	
日本アスパラガス株式會社	岩内町	一八、〇〇〇 匁	四、〇〇〇、〇〇〇 円	スキ
日本食品製造會社	札幌市外琴似村	二、〇〇〇	六三、〇〇〇	ゼントルマン
明治製菓株式會社	札幌市外豊平町	四、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	明治
〃 帶廣工場	帶廣市	四、〇〇〇	一〇五、〇〇〇	〃
〃 *伊達工場	伊達町	—	—	〃
朝日アスパラガス罐詰株式會社	喜茂別村	八、〇〇〇	一八、〇〇〇	朝日熊、双熊
株式會社極東罐詰製造所	小樽市	八、四〇〇	二〇、〇〇〇	オリンピック
角田村産業組合工場	夕張郡角田村	三、五〇〇	八、七五〇	星信
北澤アスパラガス工業會社	夕張町	二、〇〇〇	五、〇〇〇	ラクビー
財團法人八紘學園	札幌市外豊平町	八〇	二、〇〇〇	ハクレイドル
喜茂別産業組合工場	喜茂別村	一八、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	エ
梅林農園	札幌市外圓山町	四〇〇	一〇、〇〇〇	ルム
計		六六、一〇〇	一、六二九、〇〇〇	

第五表 北海道累年アスパラガス罐詰製造高及輸出高

年次	製造高		輸出高	
	數量	價額	數量	價額
昭和十一年	二五、〇〇〇 匁	四八、七〇〇 円	—	—
昭和十二年	三七、〇〇〇 匁	七〇、〇〇〇 円	—	—
昭和十三年	四三、〇〇〇 匁	一一、一〇〇 円	—	—
昭和十四年	六六、一〇〇 匁	一、六二九、〇〇〇 円	三、〇〇〇 匁	一五九、〇〇〇 円
				タイ、ジャバ、フィリッピン、支那及滿洲國
				?

* 昭和15年より操業豫定

第四表は昭和十四年の數字であるが、更に將來に向つては、各製造主體ともに、それらに罐詰増産計畫を樹て着々として、各々關係する原料獲得地區乃至は其の近隣地方に觸手をのぼして、之れが栽培増反に向つて農家に働きかけつゝある様であるが、一方、北海道農會、産業組合中央會北海道支會、北海道畜産組合聯合會、北聯及び酪聯より成る所謂北海道農業五團體も昨年アスパラガス罐詰を以て正式に重要輸出農産品として採り上げ、北海道農業の時局擔當的役割の遂行のために、之れが生産増加に向つて積極的に努力せん態度を示すに至つたと共に、又北海道廳では之に呼應して昭和十五年度拓殖費豫算に二萬二千五百圓を計上して、アスパラガスの新規耕作（主として育苗費補助）を助成し之れが増産を積極的にサポートすることゝなつた模様であり、本道のアスパラガスは今や漸く全國的注目を受けるに至つて居る。¹⁸⁾

一〇

擬て昭和四年百十七萬封度、十八萬二千弗の米國アスパラガス罐詰を輸入して居た我が國をして、昭和九年には八十萬七千封度、九萬三千弗に之を減退せしめた北海道アスパラガス罐詰が、時局下の今日、斯る輸入を完全に防遏したのみか、更に却つて之を海外に輸出する段階に迄到達、茲に華々しくも時節柄重要輸出品の一として登場して來たこともさることながら、私の興味を以て次に述べんとするのは、其れが加工部面に對する農村産業組合の進出過程に關してゐる。

北海道に於ける農村産業組合によるアスパラガス罐詰加工としては、夕張郡角田村の産業組合が既に昭和十一年から、他種の農産加工（味噌、醤油、製粉、製麵、其他スウィートコーン、セロリー等の罐塚詰杯）の中に之を加へ、現に其の組合加工場でアスパラガス罐詰の製造を行つてゐる。其のアスパラガス罐詰加工を開始するに至つた経過を見ると、最初此の組合の工場ではジャム、トマトケチャップ、グリーンピース、セロリー等の加工から初められ（昭和十年）、翌年味噌、醤油の醸造（今日其の主要部門たり）が開始された。アスパラガス罐詰加工

18) 例へば「バター、除虫菊、アスパラガス——北海道の三大農産輸出品」として内閣情報部週報、147號（昭和14年8月）に、“New Japanese Agricultural Products for Export,”として The Japan Economic Federation—The East Asia Economic News, vol. 1, No.5, Nov. 1939 に麗々しく紹介された。

は更に其の翌年から加へられた部門であるが、既にジャム、ケチャップ、グリーンピース等の罐詰加工を營んで居る本組合の加工場としては、之にアスパラガス罐詰部門を加へることは既存工場の人的物的設備の能率的利用となり、不變費用負擔の細分化に役立つから、多分に當該工場の經營技術的要求に合致するものがあり、謂はゞ農産加工經營の合理化でもあつたと思はれる。特にトマトケチャップ、ジャム等の如きは内地製品と畢竟競争し難く組合では最近此の部門は中止してゐる様であるが、斯る場合之と交替の意味を以てアスパラガス部門が擴張されることは、消極的には既存固定設備のアボレッセンス (Abolence) 謂はゞ非物質的資本消耗を防止する所以であると共に、積極的には組合員たる農家のために、其の生産品の加工利益を確保し、之れが中間利潤として外部に流出するを防止する所の、農村協同組合本來の機能の遂行たる意味を有つ。此の組合加工の原料アスパラガスは勿論組合員たる角田村農家の生産供出する所であるが、其の作付は素と罐詰資本、極東製造所(小樽)によつて本村農家の中に培養された僅か四町歩を、組合が「極東」から反當十圓位の對價を以つて譲り受けることに依つて取り敢へず之れが加工を開始した。之れは罐詰資本「極東」にとつても、其の工場の位置から比較的遠距離な飛び地であり、而かも其は未だ小面積であつたから蒐荷上比較的多くの經費を要するものがあつたので、相當の對價の支拂はるゝに於てはむしろ譲り渡すを以て得策と考へたので、茲に圓滿に兩者間の受渡しが成立したと思はれる。

處で角田村産業組合は其の獲得原料量を増大すべく、罐詰資本から譲り受けた右四町歩を基本とし、爾後は組合自體が、従來罐詰資本の役割であつた處の原料の培養のために、其の組合員農家に働きかけることゝなつた、即ち産業組合は農會に委託して苗を仕立て、之を組合員農家に貸付け原料受授契約を結び、之れが栽培を組合員農家に勸奨する運びとなつた。之れが爲めには右契約農家に組合は植付後採取前の二ヶ年反當、上等地にて五圓位の奨励金を附與する。本村耕地は不在地主の所有に係るものが多く、従つて本村農家の七、八割は小作經營であるが、上述奨励金は大約其の小作料額を補助する程度の實質を有たうか。本村農業は夕張町炭鑛地帯に其の蔬

菜市場を有つ關係上、從來から蔬菜栽培が相當行なはれて居り、従つて本村農家は蔬菜栽培に比較的習熟して居る。併しながら同じく蔬菜園藝作物と雖も彼等に取つて全く珍奇なアスパラガスの栽培を組合の豫定する増反面積だけ彼等の間に求むることは、組合自體が之れが培養に當つた最初の年は必ずしも容易ではなかつたけれども最近組合は却つて農家側からの栽培申込を受ける位であると言ふ。斯くて本組合の原料獲得面積は昨年約二十町歩、本年約三十町歩で將來五、六十町歩位にし度い意向を今日組合理事者は有つて居る様である。尙アスパラガス栽培には多量の堆厩肥を用ゆることの技術的必要性については曩にも述べたが、本組合が、アスパラガス栽培農家に限り、特に低利に購牛資金を貸出し、以つて本村の乳牛増殖と其の結果としての堆厩肥増産によるアスパラガス原料確保との一石二鳥策には多大の興味を覺ゆるものがある。

ともあれ角田村産業組合のアスパラガス罐詰加工は、組合の農産加工場經營合理化のために其の事業の一部門として後から之を加へたものであると言ふ意味で、われわれが次に述べるものと對蹠的事例である。而して前述の様に北海道に於ける産業組合によるアスパラガス加工としての最初のものではあるが、其の製造高は前掲第四表に見るが如く、昨年以來に於て未だ僅かに三百五十函、八千七百餘圓に過ぎないから、全道的にはアスパラガス罐詰加工の主體としての地位は低い。

二

次にわたたくしの述べたいのは其の加工事業を昨年開始した許りの喜茂別村産業組合の夫れである。之れが興味は獨り其の生産高の大なる（昭和十四年、一八、〇〇〇函、四五〇、〇〇〇圓で「日本アスパラガス」と共に第一位）に於てははなく、從來一罐詰資本と其の原料アスパラガス供出耕作組合員農家間の原料需給の特約關係に於ける該罐詰資本の前資本主義的搾取に對抗して、原料耕作農家が一舉に其の原料供給を彼等の産業組合に移し、自主的に産業組合に依つて加工製造するに至つた事實と、之れが北海道アスパラガス界に與へた影響に關しては

ある。

喜茂別村に於けるアスパラガスの栽培は、曩に詳しく述べた様に、昭和四年岩内の罐詰資本「日本アスパラガス」によつて誘發されたのであるが、「日本アスパラガス」と本村に組織された原料供出耕作組合員との間に正式に特約關係が書面契約の形で締結されたのは昭和五年十一月であつた。今其の契約の條項を見ると次の如くである。

契 約 書

〇〇〇〇〇ヲ甲トシアスパラガス耕作組合員ヲ乙トシ兩者間ニ於テアスパラガス苗並ニ之レガ生産品ノ賣買ニ付左記諸條項ヲ契約ス

第一條 乙ハ甲ヨリアスパラガス苗ヲ買取り甲ノ承認セル地域ニ於テ之ヲ栽培スルモノトス

第二條 乙ハ第一條ノアスパラガス栽培ニ依リ昭和七年ヨリ昭和二十六年八月末日マデニ收穫スベキ生産品全部ヲ賣渡スモノトス

前項アスパラガス栽培地域並ニ生産豫定數量ニ就テハ別ニ之ヲ協定ス

第三條 苗代ハ一八〇〇株ニ付金十五圓トシ三ヶ年据置キ昭和七年（收穫初年度）ヨリ三ヶ年間毎年六月十五日マデニ總金額ノ三分ノ一宛ヲ支拂フモノトス

第四條 前條苗代金ノ支拂完了ニ到ル迄之レガ見送リトシテ乙ハ甲ニ對シ借用證書並ニ右借入金ト同額ノ生産品代金ニ對スル受取委任狀ヲ差入ル、モノトス

第五條 苗代金支拂完了以前ニ於テ萬一乙ガ栽培並ニ管理ヲ怠リ或ハ中止シタル場合又ハ前記甲ニ對スル債務履行ニ支障ヲ生ズル虞アリト甲ニ於テ認ムル場合ニハ乙ハ甲ノ請求ニヨリ期日前ト雖モ即時苗代金辨濟ノ義務アルモノトス

第六條 第二條ニ依ルアスパラガス生産品ノ賣買値段ハ昭和四年及五年度ニ植付ケタルモノハ昭和七年ヨリ昭和二十六年迄ノ間ラージサイズホワイト及ビ其以上ノモノハ十五匁ニ付三圓二十錢トス

前項ラージサイズホワイト以下ノモノノ値段ハ其ノ都度甲乙間ニ於テ協定スルモノトス昭和六年及其以後ニ植付ケタルモノノ價格ハ別ニ協定ス

第七條 アスパラガス生産品ノ代金ニ對スル支拂方法ハ一ヶ月三回現金拂トス

但乙ハ昭和七年ヨリ十年マデノ間甲ニ於テ生産品ニ對スル代金中ヨリ第三條ニヨル苗代ヲ優先的ニ控除返濟ニ充當シ異

其の價格が保證されてゐると共に此の特約關係には二十ヶ年の期限が附せられてゐる。

處で本村農家が初めて「日本アスパラガス」に出荷したのは聖昭和六年であつたが、此の際多數の不合格品を出した。これは何分にも新規作物のこと故農家が栽培乃至採取技術に習熟しなかつたが爲めであらうが、一面には當初の契約規格と此の時の會社の現實受入規格との間に相違があつたことにも因由するものゝ如くである。ともあれ受入れられざる多數の不合格品を抱いた農家は、然ればとて、之を他に販賣するにも市場なきのみか、それは「日本アスパラガス」との契約面に依つて許るされない爲めに蒙つた損害必ずしも少なからず、遂に一部には之れが栽培契約を破棄せんとするものが生ずる始末であり、罐詰資本と之れが特約原料生産者との取引關係には其の出發點から既に問題をはらみ兩者間に十分折合はざる所ものが年々あつた様である。斯様な際に當つて、曩にも一言した所の新たな罐詰資本「朝日」が乗り出し來り、「日本アスパラガス」の不合格品として拒絶した原料をひそかに受入れんとし、一部耕作者の之に應じたことは當然「日本アスパラガス」と之れが特約耕作組合員間に契約違反の問題紛議を惹起した事實もある。ともあれ「日本アスパラガス」の完全なる需要獨占を許した此の地方のアスパラガス栽培に、新たな競争需要者「朝日」が登場したことによつて生ずる影響は少きを得不い。それは原料アスパラガス單價の實質上幾分の引き上げであり、此の地方アスパラガス栽培面積の急激な擴大であつた。

三

自らのイニシアーチブによつてアスパラガス栽培を培養し、そして其が今や一應の生長を遂げるや、當然之れが獨占需要者たるの地位に立つた「日本アスパラガス」に對し、強力な競争者としてアスパラガス罐詰界に登場した「朝日」罐詰資本は、同じ喜茂別村に原料を需めて立ち現はれた。即ち「朝日」は「日本アスパラガス」の原料地盤に於て前述の如き波亂を捲き起した後、本村農會及び産業組合の斡旋を受けて村内に新たに農家二百

行ニ支障ヲ生ズル虞アリト甲ニ於テ認ムル場合ハ甲ノ請求ニヨリ期日前ト雖即時借入金ハ乙ニ於テ連帶シテ支拂フモノトス

第八條 省略（アスパラガス生産物の受渡場所に關する規定）

第九條 アスパラガス生産物ハ別ニ定ムル標準ニ依リ指定ノ場所ニ於テ受入ル、モノトス

別ニ定ムル標準ハ甲乙協定スルモノトス

第十條 乙ハ本契約ニ關スル一切ノ義務履行ニ付甲ニ對シ連帶シテ其ノ責ニ任ズルモノトス

右契約ノ證トシテ本書貳通ヲ作製シ甲乙各壹通ヲ保有スルモノトス

昭和八年五月貳拾日

即ち右によつて見ると「朝日」、と之れが原料耕作組合員との契約は其の中に何等の期限もなく、一見「日本アスパラガス」の夫れに比して自由に見へるが、その自由は實質的には「朝日」罐詰資本側に一方的に自由なのであつて、耕作者にとつては、多年性のアスパラガス苗を一旦作付した以上、一定年限の間は是非これが生産嫩莖の需要を得なければならぬに對して、「朝日」は之れを買ひ入れることにはなつて居るが、其の最低價格が契約面に何等保證されて居らず、單に、價格は毎年兩者間に協定すると言ふに止まる。而かも耕作者は其の生産嫩莖を「朝日」以外に賣渡すに於ては一定の違約損害金なるものを「朝日」に支拂はなければならぬと言ふのである。言ひかへれば、價格は一應兩者間で協定すると言ふことにはなつて居ても、實質的には耕作者は「朝日」側の言ひなりになるか、さもなければ所謂違約損害金なるものを支拂はされるより他ない所の片務的な取りきめである。之れでは特約耕作者にとつて不安なるを免れない。故に耕作者側は「朝日」に對し、一定年限間の買入れの確約並に其の最低價格の保證を要求する所があつたが「朝日」は之を承認せず、斯くて、畢竟受入價格は契約面に従ひ、毎年兩者間に折衝協定して一應事なきを得たのであつた。

然るに昭和十二年夏に至り、「朝日」は何等原料嫩莖受入れ價格引き下げの理由なきに拘らず、突如として昭和

十三年度より受け入れ價格を相當低下すべきを豫告するに至り、茲に兩者間にシーリアスな問題の發端が切られることになつた。

一三

アスパラガス嫩莖は其の品質毀損し易く、其の貯藏は全然不可能であり、罐詰原料以外に本邦では今日の處販賣の途がないことは曩にも一言したが、作物の斯る性質そのものに依つて既に之れが栽培者は其の契約の相手方たる罐詰資本に對して從屬關係に立つのであるが、加之、其の耕作契約の内容が前述の如く片務的であるとすれば、罐詰資本は彼等耕作者を完全に其の經濟的支配下に置いて居るから、取引關係に於て時に不當な要求を敢へてするに至るのはむしろ自然である。斯る資本の攻勢支配に對する耕作農民の對抗は、罐詰資本に對する從屬關係から脱脚して之れが供給乃至加工を自らの協同組織によつて自主的に行ふより他に途がない。仍ち「朝日」罐詰資本の專恣に憤激した農家等は相語らつて、同年七月三十一日アスパラガス生産者大會を開催し「朝日」に對する原料供給拒絶を決議し、翌昭和十三年度よりはアスパラガスの全生産量を彼等の産業組合に出荷することを申し合せた。次いで産業組合では同年八月二十八日に臨時總會を開いて同組合の新規事業としてアスパラガスの罐詰加工に向つて進出すべく決議する所があつた。一方「朝日」側では、アスパラガス罐詰事業による所の從來の高利潤の放棄を忍び難く、且つは喜茂別村以外の「朝日」の原料地盤は當時三ヶ村六十町歩に過ぎず、斯る小面積の原料のみを以てしては既存設備の少くとも一時的廢用アボレスセンスは免れ難い。さればとて早急に新たな原料源を手に入れることはアスパラガス栽培の技術上既に不可能である等のために、從來の特約關係の維持に百方手を盡し耕作者側の結束切崩しに力を致したが、結局は「朝日」への原料供給は昭和十三年度に限り産業組合を通じて之れを行ふが爾後は「朝日」への供給を一切打ち切り、其の間産業組合は加工場の設備其他諸般の準備を進め昭和十四年度より、從來の「朝日」への供出原料を以て罐詰加工に進出することゝなつた。

併しながら「朝日」では其の後に至つても尙、今後二ケ年（此の間新たな原料地盤を可成的設定しやうとの意圖であつたらう）原料供出の繼續を願ひ、其の代償として相當金額を支拂ふ旨を申し入れたりしたけれども、組合側の意志は鞏固で之を能く拒絶した。斯くして漸くして「朝日」は喜茂別村農家との特約關係を斷念し、其の原料不足を補ふ爲めに新たに俱知安、東俱知安、留壽都村等の近隣の町村に向つて新たな地盤の設定計畫を進めるに至つた。

北海道廳に於ては此の間の事情を注視し、一喜茂別村にアスバラガス罐詰加工の二大工場を設置することの國民經濟的不利を考慮し、「朝日」に對し産業組合に其の工場を讓渡せしむべく勸奨斡旋する所があつたが、「朝日」は新らしき原料地盤の設定により三、四年後には再びもとの如くに工場能率をあげ、從來同様の利潤を確保すべく或は將來起るべき競争をも敢て辭せずとし、右の斡旋は不調に終つた。

一四

一方喜茂別村産業組合は着々としてアスバラガス加工事業計畫を進め、工場の設計、其の資金計畫、製造販賣計畫は固より、其の經營技術上の諸事項に關し細目的計畫を樹立し、加工技術者の人選まで一應の成案を得、北海道廳に對し、右農産加工事業開始のための該組合の定款改正の認可を求める所があつた。北海道廳では一方之を精査すると共に他方組合からの申請に基いて之れに對する助成金を考慮し、斯くて組合は一農村産業組合にして其の資金約十萬圓を必要とする所の農産加工事業が認可せられると共に、工業獎勵費として九千圓の補助金を獲得した外、産業組合中央金庫から七萬圓の低利資金の融通を受けて、堂々加工場を新設し、昨年シーズンに當り其の初年度加工を成功裡に了へた。即ち此の初年度の罐詰加工によつて組合は前述の如く一萬八千圓、四十五萬圓のアスバラガス罐詰を生産し、そして聞くが如くんば豫想以上の純益金があげられた様である。此の純益金は當初の計畫に従つて其の一部は償却金（減價償却以上の設備資金の償却）として積み立てられたのは固より

であるが、從來「朝日」に供出せる際の原料價格よりも貰當り二十錢高く之を組員より受け入れたるに拘らず尙特別配當金として之を原料供出組員に對し、其の供出品の等級に應じて一、二、三各等、一貫目當り三十錢、等外品一貫目當り十五錢の割を以て拂戻しをなしたる外、更に其の餘剰金は之を別途に積立て、以て將來或は起るであらうアスパラガス罐詰界の不況時に對する原料受入れ價格維持資金に充當せられた。

斯くてアスパラガス加工に對する喜茂別村産業組合の進出は、獨り右の如くにして本村の従前「朝日」への供出農家をして、其の蒙つてゐた前資本主義的搾取から解放せしめた許りではなく、此の産業組合の原料受入價格は當然他の罐詰資本による原料アスパラガス受入價格の上に影響を與へ、本村並に近接町村に原料地盤を有つ「日本アスパラガス」及び近接町村から原料を需める「朝日」は何れも其の受入價格を本年は従前よりも稍々二割方値上げして、組合の受入價格と大約同一ならしめ、又同じく本村並に近接村に原料區域を有つ小樽の「極東罐詰」は其の受入價格は一應ノミナルには従前と同様であるが、別に原料アスパラガスの等級によつてそれ〴〵貰當り四十錢乃至二十錢の獎勵金を與へて、實質上の受入價格をして前記二社と稍々同一ならしめる所があつた。畢竟本組合がアスパラガス罐詰加工を開始した事によつて、組合に原料を供出するに至つた農家をして従前の價格の少くも四割乃至五割に相當する金額の外部への流出を其の手に直接留保し得しめ（間接的には更らに所謂別途積立金其他が留保されてゐる）、又罐詰資本に原料を供給せる農家に對しては、該組合の加工進出のことなくば超過利潤として罐詰資本の手中に流れ込んだであらう所の、従前の原料價格の二割程度の金額を自らの手に留保せしむるの結果を生んだことゝなる。而して此の産業組合の罐詰加工進出は、もと「朝日」の前資本主義的利潤追求策を契機として發現したものであり、又其の結果は「朝日」自體をして本道内に更らに新たな原料栽培の急速な培養に向つて再出發せしむるに至つたこと前述の如くであるから、之を逆説的に言へば、「朝日」の前資本主義的利潤追求策も亦本道アスパラガスの今日の發展の重要な一因をなしたと謂はなければならぬ。

一五

喜茂別農村産業組合のアスパラガス加工事業への進出過程並に其の業界に與へた一應の影響は大意以上の如くであるが、茲にわれわれを特に印象づけるものゝ一つは、本組合の此の事業への進出の各過程に於て見る所の、其の實踐活動の積極性と言ふことである。此の中にわたくしは北海道の農村産業組合運動に於ける實踐の發展とも言ふが如き意味のものを受取り得やうかと考へる。即ち本邦農村産業組合運動の歴史に於て、從來一般に見られた所のものは、何處でも其のイニシアティブ乃至指導が多く官府の手又は組合の中央機關によつてとられてゐたと言ふのが普通であるが、此の場合に於ては、一農村協同組合たる喜茂別村産業組合自體が明敏にして進歩的な其の理事者を中心として、常に能動的に出で、中央地方の組合聯合會の如きは單に此の運動の進行に追隨すると言ふに止まつてゐたことは注目し得る。官府では農林省の如きは此の運動に對して消極的であり、むしろプレーキたるの役割に立つて居たが如くである。これは要するに問題の區域が地方の一小地區に差當つては限定される所の性質のものとつたが爲めと思惟される。而して茲に地方廳の態度であるが、其はよく事態の真相を注視理解し、一農村産業組合の仕事としてはむしろ類稀なる、斯る大事を一舉に解決せんとする當該組合の熱情に當面しつゝ、監督官廳としての冷靜なる精査によつて其の事務を進歩的立場に於いて處理し得たことは關係當局者の良識に基因するものであらう。

ともあれ喜茂別農村産業組合のアスパラガス加工に於ける罐詰資本排除の事跡は、事は直接的には地方一小地區の問題に止るが、これはやがて、本邦農村産業組合運動發展の一礎石となり、産業組合に於ける一般此の種事業部門の全國的發展を導く契機たるの意義は蓋し決して少くはないであらう。

一六

以上わたくしは北海道アスパラガスの今日までの發展の經緯に於ける其の經濟面の大要を素描した。其處で問

題は北海道農業とアスパラガスの將來、より、之れを一般化して北海道農業と食料加工農作物の將來と言ふことになる。日滿支經濟ブロックの展開に依つて將來當然起るであらう北海道農業の構造變化に對して、アスパラガス其他一般食料加工農作物は如何なる關聯と役割とを有つてあらうかである。更らに目を其の内部に向けるとアスパラガス其他一般食料農作物加工部面に於ける農村産業組合の有つ部署の將來並に其れが原料作物栽培、より一般化して北海道農業の構造變化に對して有つ役割の問題があるが、此等諸問題に關しては何れ稿を改めて論究する機會を有ち度いと思ふ。

只茲に一言し度いのは、北海道農業に於ける酪農經營の先行的展開に對し、アスパラガスは之に結びつくことによつて其は更に一段の發達を齎らし得やうとの期待であり、——酪農經營に於ける堆厩肥増産↓アスパラガス栽培の技術的可能性の擴大——、又北海道の粗放大面積經營の滿洲への移植政策によつて、之れが滿洲の自然的經濟的條件によく即應しモディファイされた新らしき北海道的滿洲農業形態の生成に伴ふ處の北海道農業そのものの轉換は、當然本道從來の粗放畑作經營より集約畑作へと其の方向をとらしむるには非るか。然る際に於けるアスパラガス其他食料加工農作物は北海道農業の斯る轉換に對して重要な楨杆として作用するの見透は強ち不當ではあるまい。若しそれ目を轉じて農村産業組合の農産食料品加工事業に及べば、斯る事業こそ、其れが比較的少額の固定資本設備にて足る所の低度工業部門なるが故に、農村協同組合の現段階に於て果し得る處の最も恰好な、技術的意味での工業生産部面であることは、廣く世界の協同組合運動の實踐のよく示唆する所である。腐敗性、狭市場性の食料加工農作物に於て、其の栽培者と加工者が主體を異にする時は、作物の性質そのものが既に栽培者をして加工者の經濟的支配の下に服せしめる。更らに又農産食料加工は一般に何れも其のコストの最も主要部分が原料である所の低度工業部門であり、而して斯る部門に於ては其の利潤の増進乃至維持の方法としては當然先づ第一に受入れ原料價の引下げと言ふ方向をとるは自然の成行きであり、之れが上述の事情と複合するこ

とによつて、茲に加工者の前資本主義的利潤追求の現象となつて現はれ易い。従つて斯る前資本主義的利潤の排除、支配被支配關係の克服是正への道は栽培者の自主的協同加工でなければならぬが、而かも農村協同組合にとつては、それが恰も低度工業部門なるが故によく之に進出し得、従つて上に述べた生産の社會的合理化の役割を果す十分の可能性があるのである。して見れば、茲に市場關係を一應考慮外に置く限り、農村産業組合による所の北海道アスパラガス乃至一般食料農産加工に於ける將來性は極めて明るいと言はなければならぬと同時に、其れは然らざれば他に流出するであらう加工者利潤を農家自體の手に留保する所以であるから、やがては本道農業の高度化、言ひかへれば農業の擴張再生産、資本主義化を少くも或程度可能にし、農業生産力の發展を容易ならしめることにより、前述日滿支ブロック經濟の進展の必然的要請たる北海道農業構造轉換の課題の解決を助けしむる爲めの道でもなければならぬと信ずるものである。

最後にわたくしの訪問に對し業界の事情や尊い回顧經驗談を話された各位、並にわたくしの研究のために關係書類の一部の閲覽を許るされた各位に深甚なる謝意を表して擱筆する。